

# 紛争、社会主義、経済成長

非日常の連続の中で「日常」を保つモザンビーク農村女性たちの営み

網中昭世

あみなか あきよ / 日本学術振興会特別研究員 (AA 研)、AA 研共同研究員

モザンビークは独立解放闘争以来、1975年の独立を経て東西冷戦下の代理戦争と言われる内戦が終結するまでの30年間に社会主義を経験し、紛争終結後には急激な経済成長を遂げてきた。この劇的な変化の中で「変わらぬ日常」という一定のリズムを刻み続ける者たち、それが農村の女性たちだ。

## 変わりゆく社会

モザンビークの首都マプトはアフリカ大陸随一の経済大国南アフリカの最大都市ヨハネスブルクと高速道路で直結され、実質的に一つの経済圏を形成している。その結果は1990

年代以来の経済成長率7%という数値に表れている。経済成長率を引き上げる要素は、紛争期の壊滅的な経済状況からのリバウンドと、2000年に操業が開始された巨大なアルミニウム精錬工場だ。ここで精錬されたアルミニウムは、あなたの家のハイブリッド車に必要な不可欠な軽くて丈夫な車体の一部となっているかもしれない。

しかし、この経済成長の恩恵は国民の8割を占める農民には届いていない。マクロ経済成長とはかけ離れた人々の生活するモザンビーク南部の農村、それが筆者の調査地だ。この農村部から南アフリカへは、19世紀以来今日に至るまで数世代にわたって移民が送り出されている。筆者は、その移民と送り出し社会の双方向的な影響に関心を寄せてきた。

## 「女がない」データ

移民に関する多くの研究は、もっともなことではあるが、移動する人間に焦点を当てることが多い。受け入れ社会における移民の適応、あるいは受け入れ社会や送り出し社会に移民がもたらす経済的利益が研究の中心だ。モザンビークについて言えば、南部の農村から南アフリカへ移民労働に赴く男性の移動性が注目される。それに対して、移民を送り出す社会は次世代の労働者を生み出す社会的費用だけでなく、退職後の労働者とその家族の老後も含めた社会福祉の費用の一切を負担する空間として副次的に捉えられてきた。

移民に関する政府や企業の記録から移民を送り出す人々の存在を把握するのは容易ではない。記録は物事の変化を捉えて記す傾向が強いので、非日常である人の移動を記録はしても、移動しない人々の日常を記録することは稀だ。調査地に関わる植民地期の行政文書から独立後の行政文書など、公文書館での史料調査を進める中でぶつかった壁は、時代を問わず分析の対象とするデータの中に「女がない」ということだった。男性世帯主が不在となり、女性と老人と子どもしか残されていない農村で中心的な役割を果たすはずの女性たちの姿が公的な記録からは見えてこなかった。

## 「男がない」フィールド

ところが、文書資料の欠落点を補うためにオーラル・ヒストリーを集めようと聞き取り調査を開始した農村部には「男がない」。働き盛りの男性の不在が恒常化している農村社会で家計を支えるのは女性たちだ。基盤となる農作業にも様々な形態があり、義理の関係も含めて母娘が共に作業するシブンガ (shibunga) は昔からの日課だ。早朝と夕方、日差しの弱い時間帯に畑を耕し、除草し、食材を持って帰る。赤ん坊がいれば背負いながらの作業だ。作業の合間に背負い紐代わりの綿布カブラナ (capulana) が弛んだのか、「ちょっと貸してごらん」と背負われていた孫を慣れた手つきで取り上げ、背負い直すのに手を貸す。現代も畑で目にする光景はおそらく昔も見られたに違いない。

身内だけでは人手が足りない種蒔きなどは近所の者と共同で行い、労働力を補填し、労働の対価として食事を提供する。この協働形

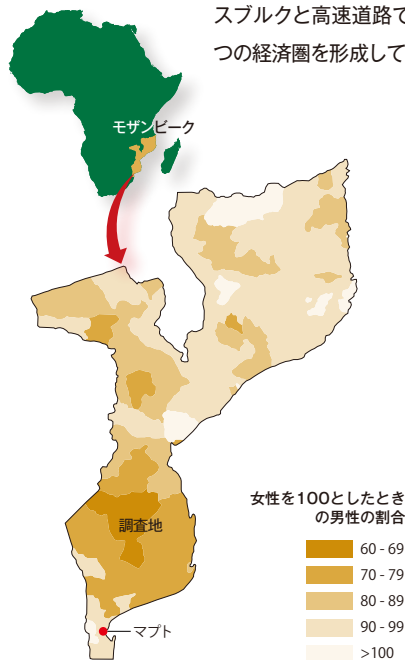
共同で雑穀 (ソルガム) の脱穀を行う女性たち。子どもをカブラナと呼ばれる綿布で背負いながらの農作業はこの時代から変わらない。出典: Daniel da Cruz, *Em Terras de Gaza*, Porto: Gazeta das Aldeias, p.241, 1910.



畑での一コマ。子どもを背負うときに使うカブラナはモザンビーク女性の必需品。女性の間では仲間の証にカブラナを贈る。



筆者が調査の拠点とする村では水不足のために不作だったので、村人は出先でトウモロコシを譲ってもらっていた。統計には表れない経済活動。



人口の男女比 (濃い色の地域は女性の比率が高い) 数世代にわたり移民労働者を送り出している調査地域では現代でも移民労働に出る男性が多い。(1997年のモザンビーク国勢調査による)



筆者の聞き取り調査に応じてくれるインフォーマントの女性は農事暦を熟知している。筆者が数年来世話になる調査助手は時々彼女に医薬品を届け、まるで祖母と孫のような関係。



陶工自慢の作品。水瓶から調理鍋までお好みのものをどうぞ。

態はツィマ (tsima) 呼ばれ、特に、男性労働力が不足する状況での開墾や大人数の人手が必要な収穫の際には広く近隣の人々に呼びかける。ツィマの作業の後には食事のほか、トウモロコシなどを原料に数日前に仕込んだ発酵酒が振る舞われることもそれとなく言い添えておくと、心なしか人の集まりがよい。場合によっては作業を始める前に景気づけに一杯、ということもあるそうだ。

開墾から種蒔きまでが終われば、あとは収穫までの単調な畑仕事に根気強く臨む。そんな彼女たちの毎日は一見すると地味だが、主食となる作物の生産者であることは強みだ。保存の利く穀物は収量のうち3分の1は販売用、3分の1は自家消費用、そして残りは次期の作付のための種子として保管する。現金や被服などの消費財が必要な場合には、換金作物の収穫のうちの余剰を仲買人であり街の万屋でもあるインド人商人の店に持ち込む。今日でも農作物の大部分が自家消費、市場で取引されるのは2割程度と言われる。農作物の販売については、男性世帯主が移民労働から一時的に戻っているうちに一言断りを入れておくのが円満の秘訣らしい。

「(男性世帯主は)『だめ』とは言わないわ。それは承知の上で訊くのよ。」

収穫物の一部を販売する決定権が誰にあるのかという問いに対する答えに、相手を立てる賢明な交際術が垣間見える。販売するといっても、彼女たちは自宅に構えて他地域からやってくる行商人を迎える立場だ。紛争によって移動が妨げられる以前は、収穫期の内陸農村に行商人が訪れるのが常だった。例えば、行商にやってきた陶工から陶器を購入する場合には、大小様々な陶器一杯分のトウモロコシや落花生など、販売者が希望する穀物と交換したという。

### 統計には表れない経済活動

女性の経済活動は多岐にわたる。行商に来る陶工もこの地域では女性の仕事だ。陶工の技術と行商のルートは母娘あるいは義理の母娘の間で伝えられ、行商では各地の市場や得意先の集落を回る。徒歩で行商をしていた時代には数日かかり、今日は乗合のミニバスを使うがそれでも最短1泊2日の小旅行となる。行商先から戻るとき、売れ行き次第で市場で日用品を買うこともあれば、街道沿いで売られる土地の物産を買って求めることもある。街道沿いでは内陸の農産物だけでなく、沿岸部から魚や海老の干物の行商に来る女性たちに出会う。市場や街道沿いの露天で売りさばくのは漁師の家の女性たちだ。

朝4時過ぎ、まだ空に星が瞬くうちに浜の女たちは動き出す。夜のうちに漁に出た男たちの船がじきに浜に帰ってくるのだ。調査地で見かける数少ない男性陣だ。浜は日に二度、早朝と夕方に戻るダウ船と水揚げを分ける女性たちで活気に満ちる。この時分、陸に上がった男たちは夜通しの漁で冷え切った体を焚き火で暖め、中には女性たちが造った強い蒸留酒をあおって体の芯から暖まる者もいる。そして東の空が明け切る頃、男性陣は三々五々、家路につく。

彼女たちが早朝の浜辺で獲れたばかりの鰹や蟹などを分配する姿を捉えようと筆者はカメラを構える。いつもなら積極的に被写体となる彼女たちだが、このときばかりはカメラを手にした筆者に誰一人目をくれることなく、ましてや写真撮影には悩ましい逆光などお構いない。朝日が照らすのはこれから売りに出す魚であり、その目利きをする真剣な彼女たちの背中だ。紛れもなくこの社会の経済の担い手である彼女たちの取引は公式統計の数値には計上されない。

### 「変わらぬ社会」と変えぬ意志

農村の女性たちは地場産業のメリットを活かし、相互補完的な経済を機能させてきた。こうした女性たちのネットワークと対を成すように昔も今も男性の多くが賃金労働の機会を求めて国内外に出稼ぎ・移民労働に赴く。ただし、農村に残る女性は男性のもたらす現金収入に全面的に依存することはない。

漁師町の日を通じて体感できる経済活動

の克明なリズムは潮の満ち引きにも似て、海辺の女性たちの大胆闊達な人柄と無関係なようには思えない。一方、内陸部で農業を営む人々の毎日の地道な仕事はやがて収穫期の実りに繋がる。農業の中心的な担い手である女性たちは穏やかだが堅実なところが魅力だ。

経済活動のハレとケは漁業に携わる女性たちにとっては一日の中に集約され、陶工の女性たちにとってはそれが窯出しと行商の期間に、そして内陸部では収穫の喜びを人々と共有する節目となる。巡る季節とともに歩む日々の営みは、生活の糧となると同時に彼女たちの刻むリズムの拠り所になる。地に足の付いた経済活動を展開する彼女たちに共通するのは、マクロ経済成長の数値には表れない経済的・社会的な自律性によって裏付けられている自信に満ちた素顔と包容力だ。

経済のために人間が存在するのではなく、人間のために経済が存在するのだということを変えて感じさせられる。矛盾した「経済発展」を余所に、この土地で出会う女性たちの生き方には、その根源的な社会のあり方を変えてはならないという頑な意志さえ感じられる。



Chizuko 2017

浜辺で水揚げを分配する女性たち。

